

二つの石濱家に見る幕末から大正期の淡路の先進性について

石濱裕美子（早稲田大学教育学部教授）

はじめに

石濱純太郎一家の漢学、史学、教育、文学など多領域にわたる事績については夙に知られている。漢学者として泊園書院の最後の院主をつとめ、その後、同院を関西大学の文学部へと昇華させ、日本の東洋史学のパイオニアとして活躍し、チベット学会をはじめとする数々の学会を創設した。また、長子恒夫、同居する甥の藤澤恒夫はいずれも小説家として名をなし、その家は安岡章太郎をして「関西文壇の一角になっている」といわしめる程であった（安岡 1966:14）。

このような純太郎一家の多彩な活動は、同じく淡路島にルーツをもつ人々の明治・大正期における多領域での活躍の中でとらえることも可能である。純太郎と同年に淡路に生まれたマルクス経済学者大内兵衛（1888-1980）が「淡路は大阪、神戸の郊外みたいところで、文化的に進んでいた」と言ったように（大内 1955:23）、淡路は海を通じて京阪のみならず、四国、九州、遠くは北海道の函館にもつながり、常に最新の情報に接していたことから、幕末、明治・大正の激動の時代、政界・経済界・学界の最前線で活動する人材を輩出した。

幕末の洲本においては、頼山陽（1780-1832）の親友である篠崎小竹（1781-1851）が益習館で、山陽の高弟である岡田鴨里が学問所で教鞭をとり、津井村の庄屋古東領左衛門（1819-1864）が天誅組に資金供与を行うなどしていたため、土佐、長州、九州から幕末の志士が往来し、洲本は志士たちのたまり場の感を呈していた。

明治に入ると、阿波は土佐に発した自由民権運動の波に洗われ、政治結社である阿波自助社がいち早く設立され、徳島慶應義塾大学を誘致した。自助社が閉社の後も淡路人は政論系あるいは政党系新聞の発行に努力し、新聞界に多くの人材を提供した。純太郎一家の活躍はこのような淡路人の活躍の延長としてもとらえることができる。

純太郎一家に影響を与えたと思われる淡路人脈の中で、本稿が特に注目するのは、一家に先んじて、漢学、ジャーナリズム、経済学、文学に人材を輩出した徳右衛門系石濱家の存在である。明治初期の同家の当主石濱鐵郎は、儒学者岡田鴨里の曾孫イマを娶り、戦前の五大紙のうち二つ『時事新報』、『報知新聞』（後の読売新聞）で新聞人として活躍し、四人の子はそれぞれ経済学、文学、実業界で名をなした。純太郎父子については多くの先行研究があるため、本稿ではこの徳右衛門系石濱家とその妻イマの実家の岡田鴨里四代に焦点を絞り、基礎的なデータを提供していきたい。

一章 二つの石濱家

石濱純太郎父子と、その祖父勝蔵、父豊蔵三代の墓は淡路島の洲本の遍照院に現存する。遍照院は江戸期には青蓮寺と地藏寺という高野山真言宗の寺であり、大正末期に青蓮寺が焼失した後、二寺が合併して現在の遍照院となった。

明治 19 年に編纂された青蓮寺の墓石簿には、当時青蓮寺に存在した墓石の主とその施主と明治 19 年当時の管理者の名前がリスト化されている。この中で石濱姓をもつ墓主をピックアップし管理者を見ていくと、「士族」石濱鐵郎を管理者とする 31 人と、「石濱屋」の屋号をもつグループの 15 人とに二分される*1。純太郎の父勝蔵はこの石濱屋の屋号をもつグループの中におり、石濱多十郎、石濱屋多助、石濱多十郎の娘、氏名不詳者の四つの墓の管理者となっている。以下にこの二つの石濱家の由来について主に過去帳と墓石簿に基づいて考察してみよう。混乱を避けるために、以下、純太郎の家系を石濱屋系、石濱鐵郎の家系を徳右衛門系と称する。ちなみに、いずれの石濱家も過去帳や戸籍などの公式書類において「濱」は共通して「濱」の字体を用いている。

一項 石濱屋系グループ

まず石濱屋について考察しよう。郷土史家の武田清市氏によると、石濱屋は尾張に起源をもち、江戸初期に蜂須賀家の淡路支配の起点であった由良に移住し、由良引けとともに洲本の街道筋（通町）に居住区を割り当てられて、洲本を代表する商家となった（武田 1989:77-78）。蜂須賀家は秀吉の直臣となって阿波を治める前には尾張海東郡蜂須賀村の出であったことから（岡田 1876: 17）、石濱屋は蜂須賀家とともに尾張から阿波に移住してきた集団であると思われる。延宝年間以後阿波藩は農工商を分離したものの、洲本においては宝暦・明和以後も、町人の下役への登用などが随時行われていた。明和（1766～）には藩政改革の一環として藩に融資を行った者には名字・帯刀が許されるようになり、石濱屋半兵衛は文化年間に名字帯刀を許されている（武田 1989: 82, 90-91）。

遍照院に残る青蓮寺の過去帳によると、石濱屋の名で最も古い記録は天和四年正月[1684]に没した石濱屋半兵衛（戒名: 性海眞澄）と、その三年後の貞享四年二月[1687]に没した石濱屋半兵衛父（俗名: 九郎左衛門; 戒名: 恵雲高照）である。

明治維新の後、純太郎の祖父石濱勝蔵こそ明治維新の波にのりそこねて破産したものの、父豊蔵が創業した丸石商会（現丸石製薬）は順調に発展し、純太郎は東京大学卒業とともに家督をつぎ、丸石製薬合名会社員となった。そのため、終生経済的に苦勞することはなく研究に打ち込めたのである（大庭脩 1994）。

二項 徳右衛門系グループ

次に徳右衛門系石濱家について述べる。鐵郎を戸主とした原戸籍によると、前戸主は鐵郎の父徳一であり、以下、祖母マチと二人の姉の名が記されている。マチは祖父徳右衛門

妻、亡曾祖父徳右衛門長女と記されていることから当主は江戸期に徳右衛門号を承襲していたことがわかる(系図参照)。青蓮寺の過去帳をひもとくと石濱徳右衛門本人ないしその係累の名が時代を超えて見いだせる。もっとも古い例としては正徳2年[1712]2月25日に没した石濱徳右衛門娘(戒名:了夢童子)と享保10年[1726]5月になくなった石濱徳右衛門(戒名:樹光宗政)の二人があげられる。

徳右衛門が江戸期に淡路でどのような仕事についていたかは江戸期の古文書から伺い知れる。1725(享保10)年に伊加利村庄屋の仲野安雄(1694-1778)の手になる文書「阿那賀町町送り付御訴訟のこと」の宛先である三人の郡付奉行のうち、一人が石濱徳右衛門である*²。この三人のうち徳右衛門を除く二人、すなわち角村新右衛門、池沢左吾右衛門の名は貞享2(1685)年の「下物部橋架橋普請について」という文書にも見られ(淡路古文書学習会編:22)、この文書における三人目の手代の名は石濱甚三郎となっている。阿波藩では1693(元禄6)年に、国奉行をおき郷方所務にあたらせ、1700(元禄13)年に国奉行の郷方所務が廃止され郡奉行三人がおかれたので(洲本市史編纂委員会:964)、角村新右衛門、池沢左吾右衛門、石濱徳右衛門の三人は、この時郡手代に任ぜられたと思われる。貞享2年から正徳2年までの期間に徳右衛門号の承襲が始まったことを考え合わせると、推測の域を出ないものの、石濱姓のものが手代職についたことを契機に徳右衛門号の名乗りを始めた可能性はある。

この後も1738(元文3)年に記された参勤交代の際の人足の手配書(淡路古文書学習会編:41)中、1773(安永7)年に記された徳島で急死した洲本の商人中島屋喜兵衛の跡目相続についての文書中にも相続に係わった役人の一人に徳右衛門の名がみえる(淡路古文書学習会編:57)。また、砂川家文書の1809(文化6)年9月、1825(文政8)年9月、1836(天保7)年8月の書簡にも徳右衛門の肩書きは「津名郡御郡代様御手代」であり*³、また、1883(嘉永6)年の洲本の役付き武士の席順を示す文書「須本諸士役付并席順姓名記」でも町手代と記されていることから(洲本市史編纂委員会:149)、徳右衛門は江戸期を通じて奉行所で手代を務めていたことが分かる。

石濱鐵郎の屋敷は原戸籍や登記簿によると「津名郡洲本常盤町八十九番」にあり、1856(安政3)年に写された洲本の古地図によっても常盤町に石濱徳右衛門の名が確認できる*⁴。禄制改革の後、手代は九等士族となったため(洲本市史編纂委員会:648-649)、明治に入って生まれた鐵郎は墓石簿や慶應義塾の入学名簿において「士族」の肩書きを冠している。

三項 両グループの関係

石濱屋系は商人、徳右衛門系は武士階層に属していたため、公的には別グループである。しかし、過去帳において石濱屋半兵衛の名が17世紀後半から見える一方、徳右衛門は18世紀初頭より登場すること、前述したように阿波藩では藩政に協力した商人を下役に取り立てていたことなどから、17世紀末から18世紀初頭に石濱屋の一人が手代にとりたてら

れ、その子孫が徳右衛門系となったという可能性が考えられよう*5。

二つの石濱家はいずれも明治になると淡路をでて大阪、東京に移住した。純太郎の父豊蔵は大阪において製菓業を起こし、その子息純太郎は東大を卒業した後、東洋史学者としてまた漢学者として名をなした。石濱鐵郎は大正末期に儒者岡田鴨里の曾孫イマを娶り、淡路をでて大阪から東京に移住し、明治・大正期新聞界で活躍しつつ、四人の男児（知行、金作、三男、秀雄）を儲けた。長男知行は九州帝国大学の経済学部の教授となり、次男金作は川端康成とともに新感覚派を開き、三男は仏文学者、四男秀雄は八幡製鉄の取締役となった*6。洲本を起源とする両家は、古い世代ほど互いを認識しており、後述するように、1923年に夭折したイマの従兄弟秀夫の葬儀では、葬列に鐵郎や大内兵衛の長兄の名が見え、純太郎も香典を送付しており、純太郎の長男石濱恒夫も金作を遠戚と認識していた。

鐵郎の家系には徳右衛門系の系図が伝わっていたが、1945年の山の手大空襲で焼失した。この系図が存在していれば石濱屋との関係の詳細も判明したと思われるが、現時点で分かることは以上である。

次に、鐵郎の妻イマの家系である儒者岡田鴨里とその学統をついだ三人と石濱鐵郎父子の事績を見ていきたいと思う。

第二章 岡田鴨里とその三人の継承者

イマの曾祖父である岡田鴨里は幕末の志士たちの愛読書である頼山陽の代表作『日本外史』を書き継ぎ志士の事績を記録した歴史家であり、かつ、藩の御儒者として学問處で教鞭を執る教育者でもあった。その学統を接いだ嫡孫真、養子文平、秀夫三代も漢学者であり、文平以後は帝国大学の教壇に立って漢学を教授したため、岡田家の漢学とその著作は地域・時代を超えて継承されていた。以下に岡田家四代の事績を岡田鴨里関連文書群*7に基づき概略を述べる。

一項 岡田鴨里（1806-1880）

写真 A

岡田鴨里は諱を僑、字を周輔といい、淡路島の王子村（現淡路市）の庄屋砂川佐一郎の4男に生まれ、掃守村（現南あわじ市）の豪商岡田家の養子となった*8。鴨里の号はこの掃守（かもり）村の名にちなんだものである。1828（文政11）年、22才で京都に出て晩年の頼山陽に師事し、山陽の遺囑を受けて、20年後に『日本外史補』14巻を脱稿し、その稿本を1850（嘉永3）年安中藩の板倉甘雨（1809-1857）に献じた*9。この功により鴨里は1861（文久元）年9月、徳島藩主により中小姓格にとりたてられ、洲本学問処の御儒者となった*10。洲本学問所は1798（寛政10）年徳島藩主蜂須賀治昭によって藩の学問處として創設されたもので、鴨里の実兄である砂川藍谷や、中田謙斎・藤江石亭等などが教鞭をとった（洲本市史編纂委員会: 418-422）。

周知のように頼山陽の『日本外史』は勤王の志士の愛読書であり、その学統を継ぐ鴨里の史伝も大義名分論を説くものであり、書も山陽のそれに酷似している。鴨里は頼山陽の息子の頼三樹三郎（1825-1859）や森田節斎（1811-1868）を始めとする志士達と深く交わり*¹¹、次女カツが嫁いだ津井村庄屋古東領左衛門は、尊皇攘夷運動の頂点で勃発した天誅組の大和拳兵に連座し獄死している*¹²。木戸孝允（1833-1877）の蔵書に鴨里の代表作『日本外史補』と本書の「列伝」にあたる『名節録』3巻（岡田鴨里関連文書 D.No.270-272）が含まれていること*¹³、大隈重信の著作『開国大勢史』においてもゴローウィン事件についての資料として、藤澤甫（東咳）と岡田橋（鴨里）兩名の高田屋嘉兵衛伝が典拠として記されていることなどは、鴨里の著作が幕末から明治にかけて広く読まれていたことを示している（大隈 1913: 491）。

鴨里の著作は同時代資料としても見るべきものがある。江戸の最末期の1866（慶應2）年、「吾耻四山十困喬人」の筆名で幕末日本外交の裏面史『草莽私記』5巻（岡田鴨里関連文書 D.No.270-283）を著し、志士たちの事績を記録した。また、鴨里の評伝・旅日記などを集めた『鴨里文稿』（岡田鴨里関連文書 D.No.284-289, 291）の巻1には、鴨里が『外史補』を献じた際の「上板倉甘雨公書」、庚午事変の年の10月に記した「初庵記」、第3巻には頼山陽の高弟森田節斎との交友を記した「節斎文鈔序」、徳島藩士であり天誅組に加わろうとして逮捕された伊藤聴秋（1820-1895）によせた文「伊藤聴秋詩鈔跋」、最後の洲本城代稲田植誠（1844-1865）の墓誌「國老稲田君墓表」、1866（慶應2）年に没した三原町甚大村地頭方村の医師の墓誌「沼田丈庵墓表」（1825-1866）、「露液翁表伝」、「青木九萬墓表」、西淡町湊の伊藤海の伝「林滄浪翁小伝」、「紀節婦津田氏事」、日露の外交交渉にあたったことで著名な高田屋嘉兵衛（1769-1827）の最古層の伝記「高田屋嘉兵衛伝」など同時代人の伝が並ぶ。文稿には、頼山陽、篠崎小竹、森田節斎、昌平饗の斎藤拙堂（1797-1865）、塩谷宕陰（1809-1867）ら、当代きっての儒者たちの硃批が附されており、鴨里の若年よりの秀才ぶりが知れる。

明治元年、鴨里は徳島藩の参政を任じられ、翌年学校懸准物頭席に任ぜられた。1870（明治3）年の庚午事変にあたっては、本藩派の説諭につとめたものの事変を防げず（新見 1966b: 16-17）、同年官界を去った。1872（明治5）年10月、蜂須賀家の歴史を編年体にとめた『蜂須賀家記』を上梓して藩に対して最後の奉公をした後*¹⁴、1878（明治11）年9月に掃守村に帰村して1880（明治13）年9月5日に舌がんで死去した。

頼山陽の著作は幕末から敗戦直前まで広く読まれ、日本人の国体意識の形成に一役かったことはよく知られている。淡路の知識人にとっても頼山陽の『日本外史』が特別なものであったことは、大内兵衛が敗戦直前の1945年の1月に記したエッセーからも見て取れる。兵衛は山陽を「天才」と呼び、『日本外史』を最高の史書と評し、『外史』が牢中で書き始められた経緯を詳説した後、河上肇を現代の山陽としてその清貧を激賞している（大内 1969: 35-41）。戦後、頼山陽の著作は危険視され、山陽やその弟子岡田鴨里に対する研究者の関心は無きに等しい状態となっている。しかし、マルクス経済学者である兵衛が山陽

の大義名分思想を範としていたことが示すように、山陽の思想は幕末から敗戦まで、あらゆる日本人の心性に影響していた。日本人の国体意識の形成や時代の空気を解明する上でも外史や外史補の研究は引き続き必要な作業であると言えよう。

二項、岡田真（1846-1876）

鴨里はスマ、カツ、ヤスの三人の娘をなした。このうち、スマが与一郎を養子に迎えて岡田家を継ぎ、二人の間に生まれた男子が、「岡田周輔成立書」において鴨里の跡継ぎとされた岡田真である*15。

真は字を真太郎、号を顛齋^{ぎょう}という。純太郎は『泊園』誌上において自らの蔵書として凌雲祖秀の詩集『禪余集』を紹介し、同書の撰者であり序文を記した岡田真を「鴨里先生の嫡孫で、余の先輩故岡田秀夫學士の伯父に當る人。」と記し、続いて片山（1929）所載の真の小伝を引用している。岡田真がこの『禪余集』を撰した文久三（1863）にまだ17才であることを鑑みると、その早熟ぶりが知れる。さらに跋を記した大村純安（1850-1870）について、純太郎は「明治初年の淡路の動揺即徳島藩政紛擾事件で死を賜はった志士の一人である。純安の實弟鹿島秀麿代議士と余の先考（豊蔵）とは何か交際があった様である」と記している*16。ここにあるように岡田真と大村純安は庚午事変（徳島藩政紛擾事件）の際にともに檄文を記し、事変後純安は切腹を命じられた*17。この『禪余集』の序と跋は二人の早くからの交友を裏付ける資料と言える。

庚午事変の後、真は謹慎を命じられ、謹慎が解けた後は、1871（明治4）年8月に徳島県の権大属に、1872（明治5）年9月には名東県の権典事に任ぜられた。しかし、1873（明治6）年8月に辞職し、東京に遊学する*18。真が役人を辞した理由は、淡路における自由民権運動の高まりと無縁ではないだろう。

1874（明治7）年1月、板垣退助らが「民選議員設立建白書」を提出し、4月に土佐に立志社を創立した。これに刺激され、4ヶ月後の8月には徳島においても阿波自助社が結成され自由民権運動が高揚した。そしてこの阿波自助社の七人の発起人のうちの一人が真である*19。岡田真は「自助社結社大意」（岡田鴨里関連文書 G.No.508）中で、人は生まれながらに天から基本的人権（権利通議）を賜っており、これを保つためには政府に頼るのではなく、自らを治め、独立不羈でなくてはならない。この権利を保全する道を広げるために、法律を始めとする諸般をともに講究・合議する結社を作るという主旨を述べている。

自助社は翌1875（明8）年2月、板垣退助を阿波に招いて政府批判の演説会を行い、4月14日に「漸次立憲体制樹立の詔」が公布されると、7月に慶應義塾大学（校長：矢野龍溪）を徳島に誘致し、8月にはこの詔を一般に向けて解説する「通諭書」を作成・配布し民権運動の宣伝に利用しようとした。

しかし、1876（明9）年9月、大審院はこの通諭書を朝憲紊乱にあたりとし、関係者四名は処罰され（通諭書事件）、徳島慶應義塾は閉鎖され、自助社も1878（明治11）年、関

係者の協議によって閉社となった。

真は通諭書事件の2ヶ月後の11月、東京で客死し、上野の海禅寺の塔頭、智光院に埋葬された。海禅寺は江戸期に臨済宗妙心寺派の四大触頭の一つであり、蜂須賀家の加護があつたことから「阿波様寺」の通称で呼ばれていた。同寺の過去帳によると真の戒名（覺心院尚古顛齋居士）には院号がつけられており、このような由緒ある寺で丁重に弔われたことから、真が旧阿波藩の人脈の中で礼をもって遇されていたことが分かる。

真の遺体はその後改葬され、現在は掃部村の鴨里の隣に眠っている。墓石に記された岡田真の字は四国大学の太田剛教授の鑑定によると沼田存庵（1825-1899）の手になるとのことである。前述したように鴨里は存庵の父丈庵の伝を記しており、存庵自身は鴨里の実兄砂川藍谷の弟子であり、華岡青洲に西洋医術を学んだ儒医である。また、弟の苔堂はイギリスの外交官アーネスト・サトウ（1843-1929）の日本語通訳として名高い。この進取の精神に富む沼田一族と鴨里・真が親交を結んでいたことは淡路の先進性を考える上でも興味深い。写真 B

真の夭折後も自助社の精神は生き続け、阿倍喜平が主催する洲本の私塾積小軒で学んだ三木善八、徳島慶應義塾の校長であった矢野龍溪らの門下生は、明治の新聞界で活躍し中央政府と対峙した。これについては後に鐵郎の項で詳述する。

三項、岡田文平（1860-1900）

1880（明治13）年に鴨里が没した後、真の二人の娘のうちの一、長女のアイの婿文平が家督を継いだ。岡田鴨里の名が見える最古の戸籍は文平を戸主とし、鴨里を前戸主とするもので、扶養者として真の妻セン、真の長女アイ、次女イマ、文平とアイの間に生まれた一男二女の名が並ぶ。

文平は奥井寒泉（1826-1886）門下で学び、岡田家から古東家に養子にはいった古東又五郎とともに門下の双璧と謳われた（片山 1929: 473）^{*20}。文平は近代的な学制の中で漢学をまなぶ道を選び、1883（明治16）年9月に、帝国文学科大学（現東京大学）古典講習科漢書課乙部へ入学し、1887（明治20）年7月に同課を卒業した。東京大学は1877年に創立したばかりであり、さらに、開設されたばかりの古典講習科漢書課（二期で募集停止）に即座に入学している事より、岡田家が時流の先端をいく家風を有していたことが知れる。

帝大卒業後、文平は1888（明治21）年には第二高等中学校（現東北大学の前身）の助教諭と漢文学と国文学の教授を兼任し、1891（明治24）年6月に教授へと昇任した。しかし、1897（明治30）年7月 病により辞職し、40才の若さで1900（明治33）年に歿した。

四項、岡田秀夫（1884-1923）

岡田文平が没した後、鴨里の学統をついだのは1884（明治17）年に岡田和三郎・フジ

(1857-1931) 夫妻の間に生まれた岡田秀夫である。岡田和三郎は鴨里の長女スマの婿与一郎が、スマの死後に後添えとの間に儲けた子であるため、鴨里と血のつながりはない。しかし、秀夫は鴨里の次女カツの曾孫である静子を娶ったため、秀夫の子供たちには鴨里の血が入ることとなった。この婚姻から大正期においても与一郎系岡田家は鴨里の血筋を追っていたことがわかる。

秀夫は文平と同じく学制の中で漢文を教育する道に進み、1910(明治43)年に、東京帝国大学文科(漢文学・文法を専攻)を卒業した。この二年後の1908年、純太郎は同じ東京帝国大学文科大学(現東京大学)支那文学科に入学し、1911年に卒業した。当時支那文学科の定員は四人から六人と小規模であり、かつ、二人は同郷であることを念頭におけば、純太郎が秀夫を「余の先輩」といった言葉の深さが伝わってくる。

卒業の前年父豊蔵が歿したため、純太郎は家業を継ぐべく卒業後は大阪に戻り、東洋学と関西の教育・文化の振興につとめた。これとは対照的に、秀夫が歩んだのは帝国大学における教職の道であった。1914(大正3)年9月には札幌帝国農科大学(現北海道大学)の講師に、1916(大正5)年12月に広島高等師範学校(現広島大学)の講師に任用され、1918(大正7)年4月には教授に昇進した。1922(大正11)年3月、父の和三郎の死亡に伴い家督を相続したが、その翌年の1923(大正12)年8月、帝国学士院の在外研究員として北京に留学中、北京の日華同仁病院において急逝した。文平と同じく享年40才の若さであった。

岡田秀夫の葬儀帳(岡田鴨里関連文書 L.No.760)には秀夫の履歴、葬儀の際の状況などが記録されているが、葬列には石濱鐵郎、大内兵衛の長兄大内宗次郎らがつらなり、死亡通知先には、石濱純太郎は無論のこと、指導教授であった東京大学の岡田正之(1864-1927)、東京帝国大学教授で中国哲学者の服部宇之吉(1867-1939)、頼成一、東京帝国大学名誉教授で漢学者の塩谷温(1878-1962)、言語学者の中目覚(1874-1959)、広島高等師範学校の斯波六郎(1894-1959)、重建懷徳堂初代専任教授の松山直藏(1871-1927)等、錚々たる漢学者・言語学者らが並んでいる。岡田鴨里関連文書は秀夫の妻、静子が保管していたものを静子の孫岡田至が2009年に神奈川県立歴史博物館に寄贈したものである。

三章 石濱鐵郎と岡田イマの息子たち

ここで、いよいよ徳右衛門系石濱家の直系である石濱鐵郎(1870-1932)と、彼と岡田真の娘むイマ(1874-1940)の間に生まれた四人の子のうち、淡路人脈とも関わりの深い知行、金作の事績についてふれる。

一項 石濱 鐵郎(1870-1932)

鐵郎は庚午事変のおきた1870(明治3)年に生まれ、11才の時に父の死を受けて戸主と

なり、1889（明治22）年4月に慶應義塾大学に入り、翌年7月に別科を卒業した*²¹。現存する慶應義塾の卒業生（塾員）名簿をたどると、鐵郎の住所は1893（明治26）年には須本（洲本）、1896（明治29）年には東京の芝区四国町、明治33年には東京の京橋區築地、身分は時事新報社員、と変遷しているため*²²、1893年から1896年の間に鐵郎の拠点は淡路から東京に移ったことがわかる。家伝ではイマが鐵郎を促して上京したといい、1894（明治27）年に24才の鐵郎はイマを娶っているため、家伝は事実である可能性が高い。純太郎の父豊蔵が純太郎の生母が没した後、漢学者日柳燕石の孫娘を娶ったのは、イマが鐵郎に嫁いだ翌年であり、純太郎の姉カツが泊園書院三代院主の藤澤黄坡に嫁いだのは八年後の1902年である。鐵郎とイマの結婚がこれらの事例に先行していることを指摘しておきたい。

真の妻センは鐵郎が1904年に日露戦争に出征するに当たり、東京の鐵郎宅に「当主見舞い」に行き腸チフスに罹って客死した（岡田鴨里関連文書 K No.795）。センにとって鐵郎が「当主」とされていることは、岡田文平の死後、岡田秀夫が学業を終え一家をなすまでは、イマの夫である鐵郎が岡田家の当主を兼務していた可能性を示唆している。

鐵郎が時事新報社に入社したことについては、淡路人が明治の初期より新聞界で広く活躍していた事実を指摘するべきであろう。イマの父岡田真が発起人の一人となった阿波の自助社は国政参加を目指していたが自助社は通論書事件の後に衰退したため、新聞縦覧所をもとにした小結社が作られはじめた。1877（明治10）年、洲本の儒学者阿倍喜平が『淡路新聞』を創刊し、三年後に同紙は神戸に進出して阿倍門下の鹿島秀麿が主幹、同じく門下の三木善八が代表をつとめる『神戸新報』が生まれた。鹿島秀麿は前述したように庚午事変の後切腹した大村純安の実弟であり、純太郎の父豊蔵と交際があった名士である。秀麿は明治九年に慶應義塾を卒業している（鹿島秀麿 1991:254-255）。

1881年、「明治十四年の政変」により大隈重信が下野し自由民権運動が弾圧されると、翌1882（明治15）年、福沢諭吉は「官民調和」「不偏不党」を掲げて日刊紙『時事新報』を創刊し、一方、大隈重信が矢野龍溪（阿波慶應義塾の元校長）とはかり立憲改進黨の機関誌にするべく『郵便報知新聞』を買収した。いずれも10年後の国会開設を視野にいたした行動である。

『時事新報』は慶應義塾の出身者によって作られ、初期は学内で印刷されていたため、慶應義塾を卒業した淡路人であり、かつ、自助社の発起人の娘を娶った鐵郎が、新聞人となって時事新報社に入社したことは自然の流れであったと思われる。三木善八は新聞経営の才に富んでいたため、1886（明治19）年、社長の矢野龍溪に招かれて経営難の『郵便報知新聞』社に入社し、1894（明治27）年に社主となった後は『報知新聞』と改題し、大衆向けの紙面づくりに励み、経営の立て直しに成功した。鐵郎はこの三木に引きぬかれて『時事新報』から『報知新聞』の用度部長職に転職し、定年までを過ごした（日本新聞年鑑；片山 1929:351）。鹿島秀麿は1890（明治23）年の第一回衆議院選挙に当選したことを皮切りに合計八回当選し、神戸を代表する代議士となり市の発展に尽くした。

次に、鐵郎とイマの間に生まれ、いずれも東京大学を卒業し、経済学者と小説家となった長男知行と次男金作について述べよう。

二項、石濱 知行 (1895-1950)

写真 C

鐵郎とイマの間に長男として生まれた石濱知行は、1920年に東京帝国大学法学士政治学科を卒業した。これに先立つこと7年前に、同科からは前述した著名なマルクス経済学者大内兵衛が卒業している。兵衛も知行も日本史中の人であり、彼らの思想、受けた迫害については多くの先行研究があるため、ここでは同郷同世代の経済学者としての共通性に留意しつつ二人の人生を略述する。

大内兵衛は鴨里の掃部村に隣接した松帆村の中規模農家に、父万平・母シナの間にも九人兄弟の六男として生を受けた。生年は純太郎と同年である。男兄弟は石濱家と同じくそれぞれが多領域で活躍し、長男宗次郎は漢詩文をよくし三原郡の書記として地方自治につくした。ちなみに、岡田秀夫の葬儀に石濱鐵郎とともに参列したのはこの宗次郎である。次男幸三郎は藤澤南岳の門下生であり、母の山口家をついで県会議員となって自由民権運動に挺身した。三男愛七は海軍少将、四男亀吉は養子に出るも夭折、五男要は満鉄庶務課長となったが46才で夭折、六男が大内兵衛である。兵衛は幼き日、父より淡路の豪農や名家の栄枯盛衰の歴史を聴きながら育った(菊川 1966: 139; 大内 1955: 21-22)。この父から隣村の名儒者岡田鴨里やその師頼山陽について聴いたことが兵衛の山陽熱の始まりであろう。兵衛は当初は歴史家を志していたが、河上肇が訳したセリグマンの「歴史の経済的説明・新史観」を読んだ後、歴史を理解するためには経済を知らねばならぬと、1911年に東京帝国大学法学士経済科に入学した(菊川 1966:139-141)。

卒業後の進路について「官界にいくか、学界に残るか、・・新聞記者になりたい」と思い悩んだ三択の中に、新聞記者が入っていることに(大内 1955:78)、新聞界で淡路人が活躍する世相が感じ取れる。兵衛は結局官界に進み大蔵官僚をへて1919(大正8)年に新設の東京帝国大学経済学部助教授に着任した。しかし、翌年森戸事件に連座して免職となり、ドイツ留学を経て1923(大正12)年に復職した。さらに、時局柄1937年に再び検挙され、無罪が確定した後に大学を辞職した。戦後は東京大学に復職し、後に法政大学総長になり、社会党の設立にもかかわるなど、マルクス経済学の大御所として名を残した。

一方、石濱知行も兵衛と同じく帝大卒業後、ドイツ留学を経て九州帝国大学に着任したものの、1928(昭和3)年に三・一五事件の余波でおきた九大事件で向坂逸郎(1897-1985)、佐々弘雄(1897-1948)とともに教壇を追われ(1928年すかなんいい4月22日付『朝日新聞』)、以後読売新聞(報知新聞の後継紙)の論説委員となり「筆一本の浪人生活」を送った。九大を追われた直後に知行は向坂逸郎とともに上京し、高円寺に家を借りると、終戦の年に空襲で焼け出されるまでここに住んだ。母イマはこの家の離れで1940年に歿している(石濱知行 1947)。

戦後 1946 年、知行は九州帝国大学に復職したものの(1945 年 11 月 24 日付『朝日新聞』)、1950 年に結核により死亡した。葬儀は駿河台の政経ビル内の中国研究所の所葬とされ、大内兵衛が葬儀委員長となった(1950 年 8 月 2 日付『読売新聞』夕刊)。当時中国研究所は、日本統計研究所、大原社会問題研究所、国民経済研究協会の三法人とともに、東亜研究所(初代総裁: 近衛文麿)の後身の政治経済研究所に統合され、政経ビル内に入っていた。大内兵衛は当時この政治経済研究所の常務理事をつとめており、知行も中国研究所所員の肩書きをもっていたため所葬となったのであろう。

大内兵衛が東京帝国大学に入学した一年前の 1910 年に岡田秀夫が同大文科を卒業しており、入学した同年の 1911 年に、石濱純太郎は同大の文科を卒業している。純太郎一家は関西の文化、教育、学界の振興者としてのイメージが強いが、その子息恒夫も甥の藤澤桓夫も京都大学ではなく、東京帝国大学を卒業している。この理由として淡路人脈の影響を考慮することもできよう。

三項、石濱 金作 (1899-1968)

純太郎、イマの次男石濱金作は川端康成(1899-1972)と同年代であり、両者は一高で出会い揃って 1920 年に東京帝国大学英文學科に進み(石濱金作 1950b)、在学中の 1921 年に第六次『新思潮』を創刊し、1924 年には『文藝時代』の創刊にもかわり、それらに発表した評論や小説により、新感覚派として一世を風靡したことは文学史上よく知られている。1925(大正 14)年 3 月、石濱純太郎の甥である藤澤桓夫(1904-1989)は大阪高校の文科生を中心とした 9 人で同人誌『辻馬車』を創刊した。藤澤桓夫は同誌に「冬の花」という短編小説を發表し、川端康成がこれを文芸時評において好意的にとりあげたため、桓夫は新進の小説家として早くから注目された(藤沢 1981: 147-150)。この『辻馬車』の翌年 1926 年 7 月号には金作が「覗く」という短編小説を、8 月号にはその金作の第三男が「鯿つり」という短編小説を、同号に純太郎の弟石濱敬次郎も一文を寄稿していることから、桓夫・敬次郎、金作・三男の両石濱家は当初は協力関係にあったことが分かる(石濱金作 1926; 石濱三男 1926; 石濱敬次郎 1926)。写真 D

しかし、川端康成や横光利一や菊池寛たちが芥川龍之介にならって酒を飲まない生活を送っていたことに比し(藤沢 1981: 165-167)、金作は酒飲みであった。金作は菊池寛、直木三十五とともに銀座のバーを徘徊し、1930 年、菊池のひいきの女給と駆け落ちしたことを契機に文壇から離れ、1936 年に菊池の斡旋で帝国馬匹協会会誌の主筆となった後は、戦後まで創作から遠ざかった(井上謙 1968)。

戦後、金作は文壇を離れた時期をこう回想している。

「あれはもう駄目だ。放っておくより仕方がない」と、私の十数年来の学生時代か

らの親友である川端康成は、道徳的に私の不しだらを苦々しく思って心で非難していた。私はもう文学も教職も妻も子も何もかも、はかなく、空々しくって、只無名の、巷間の庶民の生活に憧れた（石濱金作 1950a: 62）。・・・・・・・・

やはり私には若干の心の引け目があった。大袈裟に云えば、昔ならお手打ちである。主人の思い者を、主人がまだそれを手に入れぬうちに私が取ってしまったのである（石濱金作 1950a: 63）。・・・・・・・・

私がつえに惹かれたのは、きっとその破滅への誘惑であったに違いない。破滅の神がつえを通じて私を呼びにきたのである。がつえが私と菊池氏の間立ち塞がり、横光利一、池谷信三郎が私に向かって忠告し、近藤柏次郎がその末路の模範を示し、川端康成が私を呪詛するのは、皆この破滅から私を救ってくれる爲の、人間的な温情だったのだろう。しかしとうとう私はそれに捕らえられた（石濱金作 1950a: 65）。

このような状態になった後、菊池寛をとりまく文壇の若手が石濱金作について言及しにくくなったことは想像に難くない。藤澤恒夫は 1926（大正 15）年に東京帝国大学文学部国文科に入学し、1931 年に卒業した後は肺病に罹患していたことから帰阪し、純太郎の屋敷に同居した。ちなみに、鐵郎の四男秀雄は恒夫とほぼ同時期に東京帝国大学経済学部在籍していた。

藤澤恒夫が 1941 年に発表した小説『新雪』の主人公の青年のモデルはこの年東京帝国大学文学部美術史学科に入学した純太郎の長男恒夫（1923-2004）である（安岡 1966:14）。石濱恒夫は自宅内にある藤澤恒夫の蔵書を通じて川端のファンとなり、大阪高校一年生だった 1940 年に、母のつくったお重を新大阪のホテルに滞在する川端に届けた際に、川端と初対面した（茨木市立川端康成文学館 1989: 20-21）。後に恒夫は川端康成の弟子となり、ノーベル文学賞を受賞するオスロの旅に同行したことはあまりにも有名である。

しかし、川端にとって石濱といえば一高時代からの友、金作であった。恒夫も以下の様に回想している。

また、兵隊に行く時、今、文学館にあるでしょ、日章旗に寄せ書きの。あれをもって川端さんのところへお訪ねしたんです。

「ごめんください。石濱です」と言ったら、石濱金作さんとま違うてね、

「金作さーん」と川端さんがパッと出てきてね

「ああ、君ですか」と言ったのを覚えています。

石濱金作さんのご先祖は、淡路島の洲本で、僕ともそうです。系図みたいなもん残ってませんが、きっとだったらご先祖が一緒に、遠い親戚なんでしょう。そういう親しみもあったんと違いますか（茨木市立川端康成文学館 1989: 23）

川端も

私の裏町好みの共犯者は、石濱金作氏であった。一高に入学すると直ぐから結ばれた石濱氏との交友は、全く共犯者といふ言葉しかないような深入りであった。書くこと多過ぎて書く気にもなれぬ。二身一体の因果者のやうに、相手が鼻につくことが自己嫌悪と同じに近い友人だった（川端 1934）

といい、当の金作も「一方は文壇の最高峰で、一方は文壇の浪人だが、でも二人は三十年来の友人であった」（石濱金作 1950b :62）と言うこれらの言葉は、石濱金作と川端康成の長い縁を示しており、それは恒夫や恒夫と川端の関係に先行するものとして銘記しておくべきであろう。

おわりに

以上、両石濱家の歴史を、関係する淡路人とともに幕末から終戦に至るまで概観してきた。要点をまとめると以下のようなになる。

両石濱家は大正末期まで洲本の青蓮寺を菩提寺としていた。純太郎、祖父、父、子息恒夫の墓は現在も青蓮寺の後継寺院である遍照院に存在する。

両家ともに漢学の家との婚姻関係を築いた。1894年に石濱鐵郎が岡田鴨里の曾孫である岡田イマを娶った後、純太郎の父石濱豊蔵が1896年に日柳燕石の孫娘を娶り、1902年に、純太郎の姉カツが漢学者藤澤黄坡に嫁いだ。

帝国大学指向について言えば、鴨里の養子岡田文平（1887）が設立されたばかりの東京帝国大学の漢文科に入ったことを皮切りに、岡田秀夫（1909）、石濱純太郎（1911）、大内兵衛（1913）、鐵郎・イマの子である石濱知行（1920）、金作（1924）、秀雄（1931）三兄弟、純太郎の甥の藤澤恒夫（1931）、子息恒夫が、この順番で東京帝国大学を卒業した。つまり、純太郎本人も長男も甥も関西を拠点にしての活動で名をなしたにも拘わらず、東京大学を指向していることは注目すべきであろう。

藤澤恒夫は処女作を川端康成に認められて文壇にデビューし、石濱恒夫も川端康成を師と仰いでいた。しかし、川端康成と石濱金作との一高以来の交友関係は恒夫と恒夫二人と川端の関係に先んじていた。

これらのことは、純太郎一家の行路選択にあたっては、徳右衛門系石濱家や岡田家が先行モデルとなって直接・間接に影響していた可能性を示唆していよう。

岡田鴨里の子孫は女系である上に、孫も婿も三代続いて夭折した。曾孫のイマがなした息子たちも、石濱知行は復職後まもなく肺病で歿したため、戦後も活躍した大内兵衛、向坂逸郎二大学者の影に隠れた。大正末期には石濱・川端と文壇でもてはやされた石濱金作も1930年に文壇から離れ、人々の記憶から消えた。しかし、通観すれば彼らは尊皇攘夷運動、自由民権運動、マルクス思想研究、大正期の文壇などその時代その時代を象徴する時

流が始まる時、その中心において活動していた人々であった。同郷の純太郎一家の先行モデルとしてだけではなく、淡路の知識人の先進性の具体例としても見るべきものがあるであろう。

●参考文献

- 淡路古文書学習会編（1995）『淡路の近世文書』洲本市立淡路文化資料館
淡路資料館編（1994）『淡路三原町八木島田家文書』平成六年第一集
池内輝雄（2004）『時事新報目録文芸篇大正期』八木書店
石濱金作（1926）「覗く」『辻馬車』17: 2-7
石濱金作（1950a）「青春行状記一人間・菊池寛」『改造文芸』2（5）:52-66
石濱金作（1950b）「無常迅速—青春修行記」『文藝読物』9（5）: 62-85
石濱敬次郎（1926）「Adonis s'assourdit」『辻馬車』17: 25-28
石濱恒夫ほか（1974）『川端康成: その人・その故郷』婦人と暮しの会出版局
石浜知行（1947）「僕の住宅問題」『商工人』時事通信社:31-34
石濱三男（1926）「鯨つり」『辻馬車』18: 2-7
石濱裕美子（2016）「神奈川県立歴史博物館蔵「岡田鴨里関連文書」『史観』175:116-143
井上謙・保昌正夫作製（1968）「石濱金作年譜 改訂」『日本現代文學全集 67 新覺感派文學集』講談社: 442-443
茨木市立川端康成文学館（1989）『川端康成その人と故郷』茨木市教育委員会
大内兵衛（1955）『私の履歴書』河出新書
大内兵衛（1969）『忘れえぬ人』角川選書
大隈重信（1913）『開国大勢史』早稲田大学出版部
大庭脩（1994）「石濱純太郎」江上波夫編『東洋学の系譜』大修館書店: 151-161
岡田鴨里（1876）『蜂須賀家記』東洋社
「岡田鴨里関連文書」神奈川県立歴史博物館所蔵。(Cf. 石濱裕美子 2016)
『岡田周輔 成立書并系圖』徳島大学付属図書館蔵データ番号: HC00002979
鹿島秀麿（1991）『行路の灯』日本編集社
片山嘉一郎編（1929-32）『淡路之誇』実業之淡路社
川端康成（1934）「文学的自叙伝」『新潮』5月号
菊川兼男（1966）『西淡町風土記』西淡町教育委員会
慶應義塾編（1924）『慶應義塾々員名簿』慶應義塾
慶應義塾福澤研究センター編（1989）『福澤関係文書 福澤諭吉と慶應義塾』[マイクロ資料]
雄松堂書店
新聞研究所 『日本新聞年鑑』
洲本市立淡路文化史料館編（1998）『淡路文化史料館収蔵史料目録第十五集 津名町旧王子
村庄屋砂川文書』

洲本市史編纂委員会編（1974）『洲本市史』洲本市
 高見沢恵子（1996）「石濱金作の歩み」『淵叢』5
 武田清市（1989）『近世淡路史考』近代文藝社
 東京大学三学部編（1884）『東京大学法理文三学部一覽』丸屋善七
 東京帝国大学編（1933）『東京帝国大学卒業生氏名録』丸善
 徳島県立文書館編（2001）『阿波の自由民権運動』徳島県立文書館
 新見貫次（1966a）「淡路の新聞と新聞人」『兵庫史学』43:18-30.
 新見貫次（1966b）『岡田鴨里』兵庫県教育委員会他
 新見貫次（1970）『淡路史』のじぎく文庫
 西松五郎（1979）『「神戸又新日報」略史』『歴史と神戸』18: 2-40
 平田真玄管理（1886）『淡路國津名郡川傍町 青蓮寺墓石簿』遍照院所蔵
 藤沢桓夫（1981）『大阪自叙伝』中公文庫
 安岡章太郎（1966）『良友・悪友』新潮社

系図

年表

-
- ¹ 平田真玄 1886。管理者不詳その他で石濱屋、徳右衛門どちらのグループに属するか不明な墓主も三名いる。
- ² 淡路古文書学習会編: 37-38。仲野安雄については菊川 1966: 111-119 参照。
- ³ この他にも 1849（嘉永2）年 10 月 10 日また、安政年間 3 月 20 日の書簡にも、徳右衛門の名前が確認できる（洲本市立淡路文化史料館 1998: No. 36-4, No. 37-24, No. 40-25, No.46-14, No.52-31）。
- ⁴ 屋敷所在地ならびに登記簿の確認に際しては益習の集いの三宅玉峰会長にお骨折りいただいた。ここに謝意を表したい。また、同会の高田知幸事務局長には淡路の江戸期、新聞史関連の論文を蒐集する際、多くのご協力と御助言を戴いた。深謝したい。
- ⁵ 石濱鐵郎が管理する墓石の中に文政 8 年[1825]4 月 22 日になくなった石濱半兵衛（戒名: 真光童子）という名の者がいることも二家の関係を暗示している。
- ⁶ 八幡エコンスチール株式会社発行、昭和 37 年 6 月 25 日『ニューズエコノ』号外社長追悼号。知行と金作の事績については後述する。
- ⁷ 四代の詳細な年譜は石濱裕美子 2916 参照。岡田鴨里関連文書の目録は石濱裕美子 2016:128-141 に掲載されている。概要としては A～E 群が岡田鴨里の著作とその資料群、G 群が真、H 群が文平、I 群が秀夫の著作群であり、L 群の雑物、II の追加にも鴨里以後の岡田家の動向を示す文書類が含まれている。
- ⁸ 鴨里の生家は兵庫県淡路市王子 574 に現存する。岡田家は藩より御銀主の身分をもらった豪商であった（岡田周輔成立書）。
- ⁹ 以上は『日本外史補』の序文に基づく。外史補の自筆の草稿、完成稿は岡田鴨里関連文書 B 群、使用した資料類は C 群である。
- ¹⁰ 「岡田周輔成立書」によると、鴨里が中小姓格となって独立した後、岡田家の家督は長女の婿、与一郎に譲られた。同成立書は岡田家の由来、鴨里の二人の妻、三人の娘の嫁ぎ先、長女の婿であり養子の与一郎の実家などの情報も提供してくれる。
- ¹¹ 一例として岡田鴨里関連文書 K.No.804 の頼三樹三郎の軸装書簡が挙げられる。
- ¹² 天誅組の挙兵の二ヶ月前の 6 月、鴨里は「五倫の説」を記している（岡田鴨里関連文書 D.No.290）。古東領左衛門については菊川 1966: 120-127 参照
- ¹³ 京都大学附属図書館谷村文庫に木戸孝允の蔵書印「長門桂氏図書之記」の捺された『日本外史補』と『名節録』が所蔵されている。
- ¹⁴ 岡田鴨里関連文書 A 群は『蜂須賀家記』の未定稿と資料類である。

-
- ¹⁵ カツは鴨里の実家砂川家に、ヤスは前述のごとく津井村の庄屋古東領左衛門に嫁いだ。これら三家と鴨里の子孫との関係については石濱（2016）を参照。
- ¹⁶ 魚石（純太郎の雅号）「好治間事室藏書記」『泊園』55: 1942年1月31日。本記事は吾妻重二教授にご教示賜った。謝意を表したい。
- ¹⁷ 真と純安の関係は鹿島秀麿 1991:253; 洲本市史編纂委員会:684-685 参照。 庚午事変の檄文は岡田鴨里関連文書 II. No.768 にも収録されている。
- ¹⁸ 官歴については岡田真墓誌に主に基づく。
- ¹⁹ 明治七年八月三日に結社の届け出をだしたのは賀川純一（賀川豊彦の父）、新居敦二郎、湯浅直通、藤本文策、岡田直（真）、高井幸雄、井上高格七人である（明治7年9月11日付『徳島新聞』）。
- ²⁰ 奥井寒泉は藤森弘庵（1799-1862）門下の淡路の朱子学者であり、益習館の儒者篠崎小竹（1781-1851）の親友奥井中里（1784-1846）の子息である。古東又五郎と岡田家の関係については系図を参照。
- ²¹ 入社帳の記録では住所の後に「戸主士族」とあり、下宿先と思われる「芝区愛宕下八巻町目四番地平井 断方」が記されている。卒業の記録は『明治23年卒業名簿』で確認できる（福沢関連資料 K5-A 01-01）。
- ²² 明治29年の住所の典拠は『卒業生現在生 姓名録』（福沢関連文書 K5-A 08-0）1による。四国町の名はかつて四国大名の家臣の家が多かったためにこの名がついた。明治33年の情報の典拠は『慶應義塾塾員姓名録』（福沢関連文書 K5-A 09-01）による。